

2013年11月15日
第209号(隔月刊)

題字 住谷悦治



燎 原 社
(京都の民主運動史を語る会)
代表 岩井忠熊
事務局
京都市左京区高野東開町1-23
第三住宅 33-302 井手幸喜
〒606-8107
tel & fax 075 (722) 3823



鞍馬石に彫られた力強い碑。西方、中国に向かって立っている。
側に植えられた桜の葉が紅く色づいていた(11月1日)

「日中不再戦」の碑
(右京区嵐山中ノ島)

嵐にも負けず45年

「京都の民主運動史」 史跡散歩⑨

〔連載〕

9月16日早朝、台風18号による桂川の増水で嵐山にある中ノ島は濁流に吞まれた。飲食店

などに大きな被害を出し、敷き詰められていた玉石や大きな石も流失した。しかし、「日中不再戦」の碑はびくともしなかった。

この碑は1967年7月7日の盧溝橋事件30周年を記念して、翌68年7月に建立された。日中友好協会府連が中心になって呼びかけ、碑の文字は大西良慶清水寺貫主が揮毫した。「良慶九十四雙」とあり、94歳のときの書。高さ3・

3mという大きさのため当初は拡大して彫るつもりでお願いしたところ「原寸で書く」と大きく力強い字を一気に書かれたという。

裏には「これは日清戦争から太平洋戦争を通じて、日本ならびに中国の人民がこうむった悲劇を断じてくりかえさない決意の表明である。同時に、いまだ侵略勢力が横行している時、日本・朝鮮・中国・ベトナムなどアジア諸民族は固く団結し、再びアジアを戦場としない決意の表明である」と記されている。

当時、中国は「文化大革命」の時代、日中友好運動も困難を極めたが、京都では、蜷川知事も積極的協力し、府が管理する景勝の地への碑建立を認め府民ぐるみの運動が展開された。

「京大学生運動史研究会」で解明されてきたこと

「大学の自治」「大学の自由」の危機 滝川事件から80年 今また戦争への前触れ

忘れ得ぬ人 盲目の社会主義者小野兼次郎 消えた足跡を探る

私の一期一会⑦ 啄木研究家で京大名誉教授の田中礼さんに聞く

「学徒出陣70年」に考えたこと

〈資料〉革也と丹波 岩崎革也旧邸の新資料をめぐって(上)

BOOK 須田稔・桐田勝子著『腹の底まで憲法で行こう!』

9月例会 山本正志氏の報告 2

鯨坂 真 6

岸 博実 8

佐藤 和夫 10

岩井 忠熊 13

14

16

11月例会案内
会員消息
催し案内／編集後記
16

16

「京大学生運動史研究会」で 解明されてきたこと

9月例会 山本正志氏の報告（要旨）



京都の民主運動史を語る会9月例会は9月20日午後、東山いきいき市民活動センター会議室で開かれ、遠く岡山県などからも参加者がありました。山本正志氏（京都大学学生運動史研究会事務局長）が、これまで明らかにしてきたことを中心に語り、参加したOBからも自らの体験が次々報告されました。以下は山本氏の報告要旨。

今日のお話の主題は「京大学生運動史研究会」のこれまでの取り組みで、何が明らかになってきたのか、何を解明していくことが必要なのか、ということなのですが、お渡しした資料「平和は求めて追うべし—京大反戦自由の伝統」は1980年代に民青同盟京大地区委員会がまとめ、学生新聞「京大版」に掲載されたものです。これは学内でも配布されていますので私も持っていました。

はじめに 私の略歴

最初に私の経歴を紹介させていただきます。

1965年4月に入学（理学部）、民青同盟は倉敷青陵高校時代から加盟、そのまま学生運動（統一派・平和を守る会）に加わりました。当時

京大同学会（全学自治会）も教養部自治会も執行部は社会学同・中核派等のトロツキスト連合によって握られていました。

当時、アメリカのベトナム侵略反対、日韓条約反対闘争が闘われていましたが、6月の教養部自治会選挙で委員長は社会学同のUが当選しましたが、副委員長には僅差で私が当選し、常任委員会は多数を握りました。同時に行われた同学会代議員選挙では多数を獲得し、同学会を民主化、初代の委員長は村上治充さんでした。

66年12月に同学会委員長に選出され、67年12月まで2期つとめました。が、思い出深いのが全学で闘われた自衛官入学反対闘争です。工学部院生協議会を中心に60年代に入って取

り組まれてきたこの闘いは、ついに全学学生大会・全学ストに至り、奥田総長との大衆団交で「京大に自衛官は入れない」という趣旨の確認を勝ち取り、その成果は全国の大学に波及してゆきました。

68年から69年にかけて京大学生党委員会の責任者をつとめました。当時京大でもトロツキスト諸派がヘルメット・ゲバ棒によるデモや「内ゲバ」を繰り返していましたが、医学部、文学部を除くほとんどの自治会を民主化し、日本共産党員も400人を超えるまでになりました。

71年3月に6年間の学生生活を終えて党（東地区委員会）の専従になりましたが、80年から85年の間は京都府委員会で知識人対策を担当しました。この間、各大学の先生方と付き合える機会をもつことができ、京都の民主的知識人の層の厚さを実感することができました。

87年に京都市議員に立候補することになり、穀田さんなどとともに当選、2007年4月まで20年間市

執筆者紹介

山本正志（やまもと・まさし） 京都大学学生運動史研究会事務局長。左京区在住。

鰐坂 真（あじさか・まこと） 関西大学名誉教授。左京区在住。

岸 博実（きし・ひろみ） 京都府立盲学校・滋賀大学非常勤講師。宇治市在住。

佐藤和夫（さとう・かずお） 本会世話人、前京都市議。伏見区在住。

岩井忠熊（いらい・ただくま） 本会代表。立命館大学名誉教授。滋賀県大津市在住。

会議員をつとめました。じつは立候補が決まった当時、鰐坂真先生や友人などの呼びかけで「励ます集い」が西部食堂で開かれ約80人が参加したのですが、案内状を送ったOBはおそらく400人以上あったと思います。私は議員を辞めるまでこの400人近くの先輩・後輩のOBに毎年年賀状を出してきました。おそらく1960年頃から75年頃までの共に活動した仲間の数は2千人近くなるとは思います。公務員や教員関係はともかく、銀行や企業に就職されたOBとは住所は分かっていますが私の名前で連絡をとることはしませんでした。

私の思いと研究会の呼びかけ

07年に議員を辞めた後もこの年賀状は続けています。11年は年賀に代

えて「年頭所感」をお送りしました。その中で

「『平和は求めて追うべし：京大反戦自由の伝統』を読むにつけ、私の心に長く温めてきた企画がある。それは『物語・京大学生運動史』とも言える、少しでも充実した私たちの先輩や同僚、後輩たちの足跡を残しておくことができなかつたか、ということである。戦後、学園復興の闘いから安保闘争へと京大学生運動の変遷の話を先輩から聞くにつけ、私にはどうしても書き残して後世に伝えておきたいと思ひ続けてきた課題がある。それは、戦後一貫して京大学生運動を支え、大きな役割を果たしてきた『日本共産党京大学生細胞（後の党委員会）の闘いの歴史』を発掘し記録することである。残念ながらこの点については、正式の記録文書などは入手できないという困難もある。このあたりで、自分にしかできない仕事として取り掛かることを決意して2011年の出発としようと思う」

と書きました。あちこちのOBから反響がありました。

「京大学生運動史研究会」を呼びかけるにあたって鰐坂先生をはじめ幾人かの方と相談して、11年1月23日に第1回の会合を持ちました。岩井忠熊、芦田文夫、中野一新、家野貞夫、湯山哲守の諸氏と私の6人で話し合いの結果、以下のことを確認

しました。

①資料（『平和は求めて追うべし』を同封して24人の方に案内を差し上げた）。

②検討事項

▽「京大学生運動史研究会」は毎月開催、呼びかけに応えた賛同者に参加を呼びかける。名簿の整理・追加（山本の年賀状名簿は約400人。名簿の追加を呼びかけて対象者を増やしていく）

▽各種資料の収集・学内で配布されたビラ類をはじめ出版物、研究論文、遺稿集、新聞雑誌記事などの提供を呼びかける。

▽「月報」の発行・研究会開催予告や研究会の記録、収集資料の紹介などを中心に定期的に刊行する。会員に限定。会費年1000円（主に郵送料）とする。

▽成果物の公開と配布・資料収集と研究会での検討を経て一般公開については慎重に検討する。

といった内容でスタートしました。

現在会員は130人ですが、呼びかけると数人から5万円のカンパが寄せられるなど「待っていた」「期待している」といった声と同時に「いまさら過去を掘り返しても」「事実確認や固有名詞などの検証なく記録公開はいかがなものか」といった声も寄せられました。したがって「月報」は会員以外には非公開としてい

ます。Eメールでの送信もどこに転送されるか分かりませんので、印刷文書にこだわっています。また「京大統一派」であったOB以外は呼びかけていません。

発足当日の岩井先生のお話

11年1月23日の初回の会合では岩井忠熊氏に次のようなお話をさせていただきました（岩井先生は「療原」の06年11月15日号から「滝川事件以後 15年戦争期京大学生運動の断章」を6回連載されています）。

山田幸次さん（元京都市会議員、昭和5年三高ストで検挙、退学）は滝川事件以前の三高世代でした。当時の三高のやり方は、あのストライキの関係者を呼び出して追及し、反省するというと形式的な1週間程度の謹慎処分済まされているのです。「反省しない」というと放学になるのですが、山田幸次さんは毅然として「反省しない」と答えて放学になりました。北山茂夫さん（日本古代史専攻、元立命館大学教授）は、とても立派な人物として山田幸次さんのことをほめています。東洋史の宮崎市定さんは三高の教授だったと思います。私が弁解していました。「療原」の昭和55年（1980・6・15）には「55年とところどころ」という山田幸次さんのお話が掲載されています。

中野一新さんは「吉村達次さんに

聞いた話ですが戦前の最後の学生運動は学消（学生消費組合）だったということです。山岡亮一先生の話では、瀧川事件の翌年卒業で京大に残った人たちが『昭和9年会』というリベラルな会をつくり、西尾雅七さん、松井清さん、島恭彦さん、田畑茂二郎さん、庄司光さんなどが入っていたということです」というエピソードを紹介されています。

11年6月3日には、大阪堺市の定免政雄氏（元共産党大阪府委員会委員長、1947年9月卒）のお宅に鰐坂先生とともに伺いしてお話をお聞きました。じつは私もそうですが「戦後京大の党组织が再建されたのはいつごろで中心はどんな人たちだったのか」ということがよく分かっていなかったのです。定免さんは昨年1月お亡くなりになりました。

定免政雄氏のお話 私には47年9月に卒業しましたが、当時の細胞は100人くらいいました。若杉光夫さん（映画監督、46年卒）は京都地方委員会の常任で、彼のあと47年の夏休みが終わってから「お前がやれ」ということで私が常任になりました。当時は小柳津恒さんと儀我壮一郎さんや北牧孝三さんたちがいて、しばらくして舞鶴から河田賢治さんが帰って来しました。

11年6月25日は小畑哲雄氏のお話ですが、「療原」2007・7・15か



①天皇事件を報じる「学園新聞」



②荒神橋事件

ら「戦後京大学生運動私記」として5回連載されています。天皇事件Ⅱ写真①（51年11月）から荒神橋事件Ⅱ写真②（53年11月）頃の京大学生運動のことを詳しく書いておられます。

11年9月は田中清和氏（1961年3月卒）のお話で「安保前夜の京大学生細胞解散事件」についてお聞きました。

60年安保闘争前夜の59年11月27日、第8次全国統一行動があり、東京では全学連ブント派の扇動による国会突入がありました。新聞、テレビで大きく報道され、その是非をめぐって激しい議論が起き、日本共産党はトロツキストの挑発行為だとし

て全学連指導部のブントを批判しました。これに対し、今泉（当時の京大学生細胞キャップ、ブントでは「東の島、西の今泉」と称されていた）、北小路らが12月3日、新聞記者会見をして「日本共産党京大学生細胞解散声明」を出し、「党はもはや前衛ではなくなった」と誹謗しました。これに対して私たちは、4日夜、地区委員会の招集により黒谷のお寺で緊急会議を開き、彼らを除名し、翌5日には全学規模でビラをまきました。

（山本）「残ったのは何人いたのですか。『7人のサムライ』が残ったという伝説があるようですが？」

（田中）私の記憶では、30人近くい

ました。「7人のサムライ」という伝説（？）は、私も後に耳にしたことがありますが、おそらくは12月4日の緊急会議のときに選出された新指導部のことだろうと思います。当時、学生党员のうちには地域の組織に所属していた者もいたので、「元々学生細胞にいたのが7人」という意見もあるようです。（ここまで田中清和氏の話）

党の非合法化・分裂の中で

その後の例会では、50年以降の党の非合法化、分裂という事態の下での活動の実態のお話も幾人かの方からお聞きしました。

当時の非公然機関の「核」はビューローと呼ばれ、「表」の公然機関とは別にありました。非公然活動というのは手間、ヒマがかります。人数も要るが金はない。学内の党组织を離れて、府委員会の「総務」担当として、上下・相互の文書連絡や会議場所の設定、上部組織からきたオルグの宿泊の世話などが仕事でした。たとえば隠れ家（アジト）を準備する仕事でいえば、一週間おきに居場所を変えなければならぬので、多い時には10軒ぐらいいの家を確保しておかなければならない。しかも一部屋を提供できるほどのゆとりのある家、加えて家族全員が協力的であることが条件になるので、協力者を探して依頼することは大変だった。

た。

当時、学内で看板を出す、許可していないということ、つかみあいの喧嘩を学生補導のある先生とやったことがあります。ある時の府のビューロー会議に私宅を提供してくれたのが、その先生だったので驚いた、というお話も。また、郡部で党员を訪ねて非合法機関紙「平和と独立のために」を手渡し、かろうじて食事はそこでもいただきながら地域をまわる、という当時の日常活動の実態もお聞きしました。当時学内から次々と「工作隊」が補充され、こうした「地下活動」部隊の供給基地とされていたようです。

ところで私（山本）も「山村工作隊」ということをある先生からお聞きしていましたが、これはある方からお預かりした当時の資料の中で見つけたものです。「農工通信」（54年3月）とありますがその中で「全党の同志はこの闘いに続こう！ 周山**では君たちの来てくれるのを一日千秋の思いで待っている」といった記事があります。地域オルグの地下活動だけではなく、農村に入つての援農とオルグ（農民組合の組織化など）活動も活発だったと思えます。11年12月18日には「京大天皇事件60周年を語る集い」で神戸女学院の河西秀哉氏を招いてお話をしていたきました。

その後の例会でのテーマと話題提

供者については割愛させていただきます。次回以降も様々な分野・テーマでの話題提供者を発掘、探求していくことにしています。

貴重な資料と新たな発見

当時配布されたビラなどのまとめた資料としては、京大文書館（京大大会館）に、「戦後学生運動関係資料 解説・目録」（松尾尊兌氏寄贈50年代前半の資料）、「大学紛争関係資料 I～V 解説・目録」（尾崎芳治氏、加藤利三氏他寄贈69年～71年他）、「戦後学生運動関係資料 III 解説・目録」（西山勝夫氏寄贈61年～65年）がありますが、これらは閲覧も撮影も可能です。私も目を通しました。

また、京大新聞は現物が京大本部図書館に綴じてありますが、古い号は欠番もあります。縮刷版は第1巻（大正14年4月～昭和9年3月）以降すべて京大本部図書館にあり、私の手元にもお借りしたものがそろっています。

私の手元にある資料の中には「内部関係資料」もありまして「京都に於ける学生運動の再建統一のため」に「京都府委員会（1963.8.20）いわゆる「8・20決定」や、64年に志賀義雄らに追従して京大細胞から除名された西村・角田らに対する批判文書「党内の分派活動はゆるしえない」などもあります。またそれぞれの時期の「党会議方針書」も60年

代を中心にそろっています。ただこれらの方針書では氏名などは一切記述がありません。

51年11月発行の「平和を希うがゆえに 京大天皇事件の真相」は京大同学会の発行したパンフレットです。53年12月発行の「荒神橋・市警前で警官は何をしたか」は「11・11事件究明教授団」発行となっています。

「京大平和の戦士」（51・1・30）
51・10・16 No.2（No.36）は「京大平和の戦士社発行」となっていますが、いわば党細胞の合法宣伝物でした。

「嵐について」（京大細胞機関紙
51・5・23～55・10・8 No.4～No.210）も当時の学生運動や政治状況を知る上で貴重な資料でこれほどそろっているのは珍しいと思います。

50年以降の非合法下での活動で紹介した「平和と独立のために」（54・2・28～55・4・21 No.340～No.404）は党機関にも余り残っていないと思います。ある解説では「50年からのレッドパージ（非合法化）以降、共産党は数多くの宣伝紙や機関紙を発行していたが、52年3月に発禁になった「平和と独立のために」は党の首脳である政治局の意見を広範に下級組織に発表するための内部機関紙であった。当時は共産党の大衆機関紙である『アカハタ』（当時はカタカナ）も発禁となってお

り、共産党が『アカハタ』の後継紙を配布したら同罪ということで、この「平和と独立のために」もその編集・印刷関係者ばかりでなく読者までも逮捕するという徹底した弾圧をうけた。このような弾圧にもかかわらず「平和と独立のために」は地下で発行され続け、全国に配布されていた」とあります。

この他に個人の記憶、思い出などの書籍は実に多数ありまして、まだまだ探求の途上にあり、今後も各方面のご協力をお願いしたいと思います。

「ああ楼台の花に酔う」 写真（西



山卯三著 82・10、「田中診療所の三十年」（佐本昌平発行責任 85・8）、「人生は奇縁なり」（重富健一 04・11）、「樹々の緑―戦争のあとがき―」（細川汀 10・12）などの他にもまだまだあります。

敗戦の前年に当時の三高でおきた「軍人勅諭読み替え事件」も、最近出版された品川正治さんの手記で、こ

うした気概をもった学生がいたことを知らされました。

新たな資料を検索していますが、先日「学生新聞」のバックナンバー（京大版含む）が党本部資料室にあることが分かりました。閲覧可能ということなので関係部分をコピーできればと思っています。

今後さらに事実の掘り起こしを

まだ未着手の分野が多く残されていて、その中でも歴史・事実に関した出版物やネット上の記述（特に反共派、全共闘系列の活動家のもの）が多数横行しています。例えば、京都大学の多くの関係者が関わっている「京都大学九〇年史」京大史記の「京都大学学生運動史」（上田実 S 63年農卒）の中で「昭和42年の自衛官入学拒否の闘いは、同学会執行部（代々木系）をのり越えて、反代々木系の「全学共闘会議」によって展開されたのである」とあります。しかし「全学共闘会議」が結成されたのは69年（昭和44）いわゆる「学園紛争」（京大では69年1月の学生部封鎖以降）の中でのことであり、彼ら自身も当時は「全共闘」は名乗っていませんし、まして自衛官闘争は私が同学会委員長でしたから、彼らが主導権を握ったという局面はありません。

（7面下段に続く）

「大学の自治」「大学の自由」の危機

滝川事件から80年、今また戦争への前触れ

眞 鯨坂

(関西大学名誉教授)

橋下市長による大学介入

いま全国各地で「大学の自治」「大学の自由」が奪われようとしている。まさに大学の危機だといわねばならない。そしてそのことがそれほど世間の話題になっていないと思われることが、更に大学の危機の深刻さをあらわしている。

最近の問題として典型的なのは、橋下大阪市長が、大阪市大の学長の任期切れが迫っているが、学内の教員で選挙するという「ふざけたことを言ってきたが、そんなことはさせない」といい、学長は市長が任命するとしている問題などである。これは大学への行政の介入であり、日本維新の会の共同代表でもある橋下という政治家による大学への介入である。しかも橋下市長は知事時代から、大阪には府立大学と市立大学という二つの公立大学があり、これは二重行政の無駄であるから、これを統廃合すると言いつつ勝手に統廃合計画を進めてきている。「勝手に」というのは、この統廃合は大学の教授会などの機

関には何ら諮られることなく、行財政の論理（経費節減）だけで進められてきており、まさに政治による大学への介入である。

ところがこの問題は、橋下・維新の会共同代表という人物の特異な性格からくる例外的な事例かというところではなく、他の府県でも似たような動きが出てきている例があり、国立大学といわれてきた大学でも、いわゆる独立行政法人となつてから、これまでの国立大学ではなくなつたのであるからという具合で、従来の「大学自治」の慣行が次々に改変されていっているという事態を見ると、大阪市の問題は決して例外的な事態ではないと思われる。

歴史的に築かれてきた理念

まず「大学の自治」「大学の自由」とは何かということについて見ておこう。

「大学の自治」「大学の自由」というと、大学の教員たちが自己の保身のため、あるいは自分たちの利益のために、勝手に自治とか、自由とか

言っていると思う人がいるかもしれないが、そうではなく、これは大学という制度が作られてきた歴史的な経過のなかで、築かれて来た理念であり、大学の存在理由である。

大学といわれる制度は12世紀のヨーロッパで生まれたが（ボローニャ大学）、これは国家や封建領主などが作ったのではなく、学問をしたいという学生たちが作った「生徒組合」(universitas) から始まった。学生たちが集まり、学者を招いて講義をしてもらうという形から始まった。参加者はみな対等平等であり、ここでの権威はただ真理のみであり、いかなる権力にも金力にも暴力にも屈しないという精神で運営された。しばしば領主や行政などとトラブルが生じたが、これらの干渉を撥ね退けて、「大学の自由」を守り抜くことが大事にされた。

さまざまな紆余曲折があったが、「大学の自由」と「大学の自治」とを守り抜いたところだけが生き残り、信頼され、学生が集まり繁栄した。大学のほかにも、貴族の子弟の教育

機関や私塾があったが、自由と自治の精神を堅持した大学が持続的に発展した。ここから新しい学問が發展し、それまでの世界観をひっくり返すようなコペルニクスの地動説が生まれ、ニュートンの物理学が生まれるなど新しい科学が生まれた。あるいはマルチン・ルターの宗教改革も大学から生まれたといえよう。彼は牧師でもあったが、ビュルテンブルグ大学の教員でもあった。新しい思想・科学・文化が大学から生まれた。

大学はあくまでも学問の共同体

後の時代に、国家や封建領主や行政などが、国民教育のため義務教育の学校や中等教育の学校を作つたが、これら学校といわれるものと大学との違いがここにある。大学はあくまでも学問の共同体であり、真理にのみ忠実であるべきであり、政治や行政とは独立でなければならぬ。もちろん中学や高校でも真理は尊重されるべきであり、政治権力の介入は最大限に抑制されるべきことは言うまでもないが、特に大学では自由と自治が尊重されるべきである。

19世紀になり、生産力の發展があり、多数の科学者・技術者・官僚など専門家が必要になり、大規模な国立大学が作られるようになる。ベルリン大学が最初とされるが、この帝国大学でも、大学であるからには「大学の自治」「大学の自由」がなければ

ばならぬとして、これが強調された。生まれたばかりのこのベルリン大学から、まもなくカール・マルクスが出てきた。

日本でも19世紀、近代国家を発展させるため、高等教育の充実がはかられ、東京帝国大学、続いて京都帝国大学、そして旧七帝大が創立された。これらの帝国大学はベルリン大学をモデルに作られたが、ここでも大学であるからには、大学の自由・大学の自治がなければならぬとして、自治獲得の運動は繰り返し展開された。

沢柳事件、滝川事件の教訓

大学自治の歴史において重要とされるのは、1905年の東京帝国大学における7博士事件に続いて、1914年の京都帝国大学の沢柳事件が画期的な出来事であった。文部省の意を受けた沢柳政太郎総長が大学の改革に乗り出し、7名の教授の罷免を企てたのに対して、法学部の教授・助教授10数名が抗議して辞表を提出する騒ぎとなった。事件の拡大を恐れた文部大臣は「教授、および助教授の任免、進退に関しては、あらかじめこれを教授会に諮り、その多数の同意（または推薦）を得て、これを決する」ということを認め、沢柳総長は退陣した。総長についても「無記名投票で教授会より推薦する」という内規も定められ、い



京大滝川事件を報じる 1933年5月27日付「京都日出新聞」

め、全国の大学・専門学校・高等学校に広がり空前の学生運動となった。しかしすでに侵略戦争に向かって国民弾圧を強めつつあった軍国主義政府の強引な圧力に抗しえず、佐々木惣一・宮本英雄・宮本英修・森口繁治・末川博教授は免官、滝川教授は免職、恒藤恭・田村徳治教授も納得いかなうとして依願免官となった。

そのほか1935年には東京帝国大学的美濃部達吉教授、1937年には東京帝国大学の矢内原忠雄教授、1939年の河合栄次郎教授への弾圧など続き、日本軍国主義はアジア・太平洋戦争への道を進んでいた。

ここに見られるように大学の自治・学問の自由への弾圧は、悲惨な戦争への前触れであることは明らかである。戦後はこの痛切な反省から、憲法第23条「学問の自由はこれを保障する」という規定が明記された。私たちはこの23条を名実ともに護りぬき、いかなる権力にも金力にも暴力にも屈しない「学問の自由」「大学の自治」を大事にしたいものである。

(5面より続き)

こうした誤った歴史記述や、全学連、民青同盟、党への非難・中傷の類については事実を明らかにして公表していくことも大切な作業であると思います。中でも70年代の京大の状況を振り返ってみる時、トロツキストたちの同学会・自治会破壊と暴力的支配、岡本総長をはじめ当局との癒着・取引、竹本問題など権力の陰謀、こうした局面の真相解明と当時の活動家たちの奮闘も掘りおこし記述していくことも大切です。

寮闘争やサークルの活動も

当面、すでに報告を受け話題にした京大生協の歴史、学生部落研の歴史、京都学生芸術文化会議の歴史などの他、女子学生の運動、寮闘争（激烈な暴力攻撃との闘い）、百万遍と関田町学生会館の歴史、合唱団や唯物論研究会などサークル活動の掘り起こし、さらには民科（民主主義科学者協会）など学術関係団体や、湯川さんの核廃絶への取り組みの学生に与えた影響など、学生運動の中核部隊の歴史だけでなく世相を踏まえた学生の意識状況などの解明にも手が付けられればといった思いもあります。研究会で話し合っていきたいと思っています。

盲目の社会主義者 小野兼次郎

消えた足跡を探る

岸 博実 (京都府立盲学校教諭)

京都盲啞院の卒業生

小野兼次郎(おの・かねじろう)は、1899(明治32)年に京都で生まれ、1920年代初頭(大正10年頃)に反軍運動に参画する。時代を先駆けした盲人だが、今、彼を知る人は暁の星ほどに少ない。

それは、社会的にはマイナーな存在だった京都市立盲啞院の卒業生であったこと、反軍運動に参加した舞台が東京であったこと、「思想犯」として(おそらく)ソビエトに逃げ、そのまま「行方不明」となったことの複合した結果だと思われる。『京都府立盲学校卒業生名簿』では、1937(昭和12)年時点で既に〈住所不詳〉と記録されている。さらに、その人物や言動が掘り起こされて来なかったことにも一因を求めねばなるまい。

しかし、そのような中で、京都ライトハウスの館長・鳥居篤治郎氏と事務長・田村敬男氏など若干の人が「小野兼次郎」を追想し、彼の名を刻んでいる。京都盲啞院の生徒時代から小野と親しく、東京で暮らした頃もエスプラントを共に学んだ鳥居は、

後に、その著書『すてびやく』巻末の年譜に「思想問題で刑事に追われる身であった同窓生小野兼次郎来たり遇する」と回想した。1922(大正11)年の来訪であった。鳥居自身、ロシアからやってきた盲目のエスペランティスト・エロシエンコと親交が深かったことから、特高の訪問を受けたことがある。

山本宣治の葬送にも携わった戦前からの闘士・田村は、小野を「日本の人民解放運動に参加した最初の視覚障害者」と、讃えている。

戦時下の抵抗運動に従事した伊東三郎も、小野を記憶しており、「エスプラントをよく勉強していた」と評している。日本共産党の創立に与みしたものの、後には陣営を異にすることとなった高津正道も小野に言及する文を残している。

なお、『日本アナキズム運動人名事典』に『小野兼次郎』の一項が載せられているが、小野をアナキストとみるのは適切ではあるまい。

小野兼次郎は、1919(大正8)年に立教大学に入学し、東京で学び始めた。まもなくバハイイー教に出

会い、その教宣冊子の日本語版を担当したと伝えられる。次いで、高津正道らの作った「暁民会」に加わった。明確に社会革新・反軍の行動を起こしたのは1921(大正10)年である。

逃亡・逮捕を伝える記事

『盲詩人エロシエンコの思い出』(安垣栄一)に、小野が1921年のメーデーに参加したことが記されている。「警官と参加者の間に大乱闘が起り、多数の検束者を出した。エロシエンコもその一人であった。盲人社会主義者小野兼次郎が、革命歌を高唱し、杖を振って警官とわたり合った」と。

他の史料は、ほとんどが新聞記事と当時の運動関係者の手記類で占められる。小野本人が記したものとしては点字新聞『あけぼの』への投稿や生徒時代の作品に限られ、社会問題に関する論文などは未発見である。まず、暁民共産主義団事件を報じた当時の新聞記事から抄出しよう。



小野兼次郎(『東京朝日新聞』1922年7月5日付より)

『東京朝日新聞』(1922.7.5)が、「逮捕された／盲人主義者／(中略)日本のエロシエンコ小野」と題して書いたものだ。長い引用となるが、事件の流れを知る意味で紹介しておきたい。なお、この記事中の『日本共産党』は1921(大正10)年結成の「暁民共産主義団」を指す。「朝憲紊乱」は、彼らが行った陸軍大演習に反対するビラの配布等をさす。また、「盲人主義者」は、「盲人の社会主義者」を略した造語と解される。

「昨年十月朝憲紊乱並に出版法違反で収監された高津正道一味及同年十一月秘密結社日本共産党を組織して赤化宣伝に努めて逮捕された近藤栄蔵等と往復して赤化運動に活躍して居た京都市上京区東堀川通長者町生れの盲人小野賢(ママ)次郎(二四)は罪状発覚を恐れて一味の同志が檢舉された昨年十月早くも風を喰つて逃走した為に警視庁特別高等課では極力その行方を捜査中であつたが小野は戸塚の暁民会本部を逃走し京都に走つたが、郷里の警戒嚴重な為転転として各地を放浪し九州で様子を見計らひ今春門司から上海に行き、共産党東洋宣伝本部に身を寄せて居たが、我官憲の知る処となつたので再び内地に舞戻らとう(ママ)したのを警視庁から出張した官房特別高等課の榊原縫野両刑事の為に盲人主義者能任朝長(二二)と共に郵船山城丸に便乗せんとした処を捕へられ、

小野兼次郎の略々年譜

- 1899 (明 32) 年 2 月 23 日 木挽き業の父のもとで誕生
 1906 (明 39) 年 9 月 3 日 京都市立盲啞院入学
 1916 (大 5) 年 3 月 30 日 鍼按科卒業式で答辞
 1919 (大 8) 年 立教大学 (専門学校令) に入学 (第二種生専科生文科) 【20 歳】
 10 月 23 日 劇作家・エスペランティスト・秋田雨雀の日記に登場。「夜、エロシエンコ君が、立教大学の盲人学生小野君といっしょにきた。」
 1921 (大 10) 年 5 月 1 日 第 2 回メーデーに参加 8 月 20 日頃、高津正道、近藤栄蔵らと共に「暁民共産主義団 (暁民共産党)」結成
 1922 (大 11) 年 1 月 31 日 「暁民共産党」事件の判決
 7 月 15 日、日本共産党結成
 1923 (大 12) 年 1 月 1 日 「京都で最初の党の会議がひらかれた。」(『京都府党のあゆみ』2004 年)

年の一人であった。本を読む眼をもたぬ彼が、聴き学問だけで、よくここまで理論に徹底したと、栄蔵は舌を巻いたものであった。彼は頭がよかったばかりでなく、壮健で、活動的で、明朗な青年であった。もし眼が満足であったら美男子と分類されたであろう容貌の持主でもあった。彼は

三日午後七時五十分門司発の列車で警視庁に送還、五日午前六時二十五分東京駅着の筈である小野は長髪を惜し気も無く断つて巧みに変装し、各地の同志の補助を受け九ヶ月間官憲の眼を逃れて流浪して居たが、日本のエロシエンコとも言ふべき男で非常に頭の好い詩人肌の青年で運動には頗る熱心な主義者であつたが、盲目の為に官憲の油断に乗じて盛んに活躍して居たものである。(後略) この捕縛によつて、小野は裁判に付された。その後、行方が分からなくなる。

兼次郎が名を連ねていることを確認できる史料は見当たらない。しかし、高津の記述には相当の信頼を置いてよいのではないかとすれば、小野は京都出身者として最も早い時期に日本共産党員となった人物だったこととなる。

ソ連に亡命、行方不明に

「近藤栄蔵自伝」の近藤栄蔵も、日本共産党の結成をめぐってしばしば登場する。その言説や志操にはいかがわしさも匂うので、彼の文章については慎重な検証が必要であるということを前提としての話だが、近藤も小野について書いている。

「小野兼次郎は(中略)四歳のとき病気で完全に失明したが、非常に頭がよく、ボルシェヴィキ理論においては、当時において最も徹底した青年の一人であった。本を読む眼をもたぬ彼が、聴き学問だけで、よくここまで理論に徹底したと、栄蔵は舌を巻いたものであった。彼は頭がよかったばかりでなく、壮健で、活動的で、明朗な青年であった。もし眼が満足であったら美男子と分類されたであろう容貌の持主でもあった。彼はまた驚くべき「感」(ママ)の持主で、栄蔵の売文社はちよつと分りにくい小路の奥にあつたが、一度誰かに導かれて来てから、小野はその後、一人で間違ひなく訪ねてきた。彼はどんなに分かりにくいといわれる家でも、二度行けば三度目からは決して迷わぬと眼あきには想像のつかぬことを言っていた」

エロシエンコ研究で高名の高杉一郎は『夜明け前の歌―盲目詩人エロシエンコの生涯』(1982年)で「小野兼次郎は、大正十年(一九二二年)八月のいわゆる暁民共産党の結成には、近藤栄蔵や高津正道といっしょに参加した。大正十二年の関東大震災には一時、死を伝えられたが、彼は上海に亡命して、韓国独立党のひとびとの手でフランス租界にかくまわれ、そこから船でウラジオストクにのがれた。しかし、ゲ・ペ・ウはどういう疑いなのか、彼をとらえた。そこには、たまたま第一次日本共産党事件の検挙をのがれてきた佐野学、近藤栄蔵、高津正道などがきていたので、小野は彼らに会わせてくれと要求し近藤や高津も小野が同志であることを保証したが、ゲ・ペ・ウはどうしてもひきあわさなかった。近藤や高津のたびたびの面会要求にたいして、ソヴィエトの官憲は、小野をイルクーツクの盲学校にいたれたと答えた。しかしその後の小野の消息はまったく不明である」と書いているが、亡命後の小野に関する高杉の文章は、近藤が「伝記」の別の箇所

で記していることとはほぼ同じである。

小野は、聡明であつた。京都盲啞院時代の学業も優れている。当時は、盲学校卒では大学の受験資格が認められていなかったが、正規の入試を受けて立教に入った。史料によると、盲啞院を出たあと旧制立命館中学に籍を置き、受験資格を得ている。障害者の統合教育の先駆けでもあった。立教では、英文タイプライターを用いて試験の答案を提出したと本人が点字雑誌『あけぼの』に寄稿している。特に外国語に堪能で、エスペラントの他に英語とロシア語もかなりできたようだ。ロシア語を習得していたことが、渡航先の選択を決定づけたとすれば、結果としては仇になつたとも言いうるのだが。国外逃亡の顛末は、まだ茫漠としている。秋田雨雀は「渡露後、殺された」という噂を日記に添えている。

小野の人生と闘いを追うことは、障害者と平和運動のかかわりを明らかにするだけでなく、京都の運動史の 1 ページ目に書き加えを求めさせるかもしれない。さらには、スターリン体制の罪を検証する営みにもつながる可能性がある。現在、あるエスペランティストのご協力を得て、インターネット上にエス語で情報の提供を呼び掛けている。「誰か小野兼次郎を知りませんか」と。

私の一期一会

⑦

啄木研究家で京大名誉教授の

田中礼さん^{ひろし}に聞く

—聞き手—
佐藤和夫
(本会世話人)

田中礼さんは1931年に神戸市生まれ、今年82歳です。1960年、京大文学部英文科を卒業し、アメリカの詩人のウォルト・ホイットマン研究などを行っている京大名誉教授。また、新日本歌人協会、関西啄木懇話会・国際啄木学会などで活躍中の現役の石川啄木研究家です。10月2日、八幡市の先生のお宅を訪問し、お話を聞きました。

——去る9月の台風18号で近くの谷川があふれ、床下浸水の被害に遭われました。「燎原」誌からも災害お見舞いを申し上げます。

中学の一年先輩に妹尾河童氏

災害と言えば、僕も戦時中神戸で戦災に遭いました。直接面識はありませんが、神戸の中学時代の1年上に「少年日」の妹尾河童さんがいましたね。日君は軍事教練で教官からいじめられますけど、僕は最高点90点を付けられました。「将校適」「下士官適」「兵士適」などと適格のランク付けをされるのです。

神戸で被災し、母の実家のある

広島県尾道に疎開しました。母の実家の近くに経済学者の力石定一さん（1926年生まれ・法政大学名誉教授）の実家がありました。この人は広島県の福山誠之館中学から1944年4月三高にすすみ、その後47年4月に東大経済学部に入った方です。全学連立ち上げの頃の理論家の学生と聞いています。したがって、郷里の伝説の先輩とは旧制三高ではすれ違いでした。

——先生の「啄木論」の嚆矢ですが、1956年2月、「新日本歌人」に「啄木の系譜」として、矢代東村の短歌論

を発表しています。この東村を取り上げたそもその動機は何ですか。

僕は神戸の中学から広島県の福山誠之館中学に転校しました。戦後49年の学制改革で旧制三高1年修了で新制京大文学部英文科に入学し、60年に京大文学部を卒業しました。7年間の休学のうち4年は療養所で肺結核の療養をすることになりました。もともとその療養所は傷痍軍人の療養所だったこともあり、旧傷痍軍人やその頃のレッドパージ組の人など多士済済で、いろいろなサークルが活発でした。戦前のプロレタリ

ア短歌運動の流れを引き継ぐ「新日本歌人協会」に入会しました。当時、政治思想史研究の橋川文三さん（明治大学教授・故人）の弟で寝たきりの患者さんとノートを回覧しながら、いろいろなことを論じあったものです。

この療養所は「人間を返せ」の原爆詩人・峠三吉さん（1917-53）終焉の療養所でもありました。日本近代文学史上の文人たちでも、結核にかかった人は多いですね。

——その点、結核が国民病といわれたのも、日本の保健衛生や医療水準が「バターより大砲を」という「政治の貧困」の反映のひとつでしょうが。

強権政治を告発した啄木

1910（明治43）年、啄木は幸徳秋水らに対する大逆事件のフレイムアップを嗅ぎ取り、「時代閉塞の現状」で強権政治を告発します。

「やや遠きものに思ひし／テロリストの悲しき心も／近づく日のあり。」（啄木）

「この心かのロシヤなるうら若きニヒリストにも通ふわりなさ」（大正2年）と東村もうたいます。1910（明治43）年の「大逆事件」後の時代閉塞の焦燥にかられ、ロシア革命運動の直接行動主義としてのテロリストやニヒリ



田中礼・田中ひな子夫妻（自宅で）

休学中、結核療養所で書いた

めざめさせるといふ「新左翼の権力観」と、「大逆事件」を演出し権力がどう利用したか見抜いた啄木の「権力観」とは、対極をなしていると思います。

実は、僕はここので、当時教養学部教授であった川口是さん（憲法学・五者共闘議長。後に知事選挙候補者）の、権力者は「治安立法・治安対策が露骨なままでは困難にみまわれる」ことを悟っているという旨の文章を引用しているのです。川口さんは、ここがわかってないと、「トロツキストに指導された『全共闘』運動の政治的犯罪性の重大さも正しく理解できない」と喝破しています。私の啄木論のこの部分はあらかじめ川口さんに読んでいただきました。

赤石茂・中村富三郎ら伏見のプロレタリア文学運動に光

——「共産党など既成左翼は体制内野党に変質しているからゲバ棒・ヘルメットの『新左翼』こそ、革命の希望だ」みたいに暴力行使を擁護する「文学的立場」論は、今や歴史的に破産が証明されましたね。

さて、私は先生の啄木論では、啄木研究家の一部にある「挫折者・啄木」論への批判と、啄木愛好家による「啄木運動」の中には評価の要があると思っています。『啄木とその周辺』（2011年・洋々社刊）の「赤石茂と『山宣詠』」では、先に述べられた「新日本歌人」

会員の赤石茂（本名・中茂一、京都市伏見区淀原目）を取り上げていますが、伏見在住者とすれば我意を得たりの心境で、中村富三郎さんとか、赤石茂などの戦前からのプロレタリア文学運動につらなる風土にも培われて「西口文学」が花開いたと思います。先生と西口の出会い・『私の一期一会』はどういうものでしたか。

ひな子夫人も加わって西口さんの思い出を語る

（ここで、奥様の田中ひな子さんも加わる——1936年生まれ、作家・66年「善意通訳」で直木賞候補）

ひな子 わたしは、65年頃大阪の桃谷の公務員宿舎に住んでいました。が、大阪文学学校で知り合った前田愛子さん（作家）にさそわれて、大阪の解放会館で西口さんの「文珠九助」（改題・「直訴」）の合評会に参加したときが、西口先生とのはじめの出会いです。

礼 僕は58年3月8日の没後30周年記念の宇治「山宣祭」に参加し、その流れで宇治川縁の「花やしき」で赤石さんと浜田陽子さんたちと『短歌の会』をしました。山宣の娘、治子さん（「潮音」所属の歌人）も歌会には、その時、姿をお見せになりました。後日、西口夫妻も同席していたことを知りました。

売春防止法は56年5月成立し2年後の58年4月以降に完全実施するも

のでした。伏見区の中書島遊廓では3月15日をもって遊廓の自主廃止と「遊廓」を学生下宿に切り替える運動を、西口さん達と府学連が協力してすすめていました。その当時、僕は左京区田中に下宿していました。僕の仏文の友人がその元遊廓の学生下宿に一室を借り、新聞「赤旗」を西口さんの家に取りに行っていました。「自伝的小説『廓』の作家西口さんを紹介しようか、西口さんの奥さん、きれいだぞ」の友人の言葉につられたのか、西口さんの下宿屋に行つたのを覚えています。西口さんには会えなかったけれど、奥さんのお顔は拝見しました。

——ということは、西口さんの下宿屋の一室が洛南地区委員会になるのは、第7回党大会（58年7月）をうけた10月の第11回府党会議後でしょうね。58年洛南地区建設準備委員長としての西山秀尚さん（元・共産党府会議員団長）が西口さんに下宿屋の一室を地区事務所提供してくれるよう要請していますから。そして、59年2月の源空寺で行われた第1回洛南地区党会議で正式に地区委員会が発足しました。この年4月の一斉地方選挙で西口さんは、京都市会議員選挙に立候補し、当選しました。先生が廓だった下宿屋を訪問されるのは、京大を卒業される60年4月までの間ですね。

ひな子 わたしが「大阪文学学校」に通つたのは、60年代でしたが、当

時の文学仲間では、実存主義の文学とでも言うのでしょうか、サルトルの『嘔吐』とか安部公房の『砂の女』などがもてはやされていました。64年頃、文学学校を卒業して初めて書いた小説は、キリシタン弾圧事件、それも明治新政府になってからの弾圧・「浦上四番崩れ」を題材にしました。棄教せずに殉教の旅に流される主人公と仲間の信者たちを肯定的に描いたのが、60年安保闘争後の「挫折ブーム」の時代風潮にあわなかったみたいですね。（『浦上川』『新文学4』・64年12月、『開花の季節』所収・編集工房ノア）

西口文学の『文珠九助』（改題「直訴」）のように、拷問に屈しないで信念を貫く人の魂は、挫折を味わった人の魂より人間的な深みがない、通俗的だ、甘い、というような批評が大方だったと思います。ついながら私がこの作品を書いたすぐ後、66年には、遠藤周作さんの小説『沈黙』『黄金の国』（ドラマ）が出ました。転びパレンが主人公の作品ですね。

——まるで、世を挙げての「転向のすすめ」の流れに逆らう、その勇氣に「異議なし」。

ひな子 60年代末、西口さんが桃山に転居なさる前、個人的に文学上の相談にうかがったとき、西口さんは「長編小説はベートーベンの交響曲を聞きながら書くんだ、構成が参考になるんでね。ははん、ベートー

「出陣」ということばを実は使いたくない。正しくは
いえば「徴集延期停止」だが、新聞・ラジオや教育界が
そのことばを広めた。戦国の世ならば勇ましい儀式で酒
を酌み勝果を食べてということになるのだろうか、私た
ち学生にそのような昂揚した気分はなかった。壮行会は
あったが、これで大学とお別れかというの
が、参加した私の正直な胸の内だった。

あの頃生まれた人たちが古稀ときくと今
さらのように驚く。そんな時がたつてし
まったのか。しかし思えばあの時一斉に入
隊した友人たちも残り少なくなった。体験
を語りつぐのは生きている私たちの義務の
ように感じられる。

* * *

あの年、ガダルカナル島の撤退・山本連
合艦隊司令長官戦死・アッツ島守備隊全滅
が公表され、またスターリンググラードの独
軍が降伏し、伊の無条件降伏がつづいた。
内外の情勢、日本と独逸が危機におちい
つたことがだれの目にも明らかとなった。

日本の支配勢力は極秘の御前会議で、南
東太平洋の戦域を放棄し、日本列島を中心
として内南洋・フィリピン・ニューギニア
西部をつらねた絶対防衛圏を設定した。放
棄された島々へ補給はできないので残存兵
力のほとんどは餓死に追い込まれるという
残酷な決定である。またそれまで本土から
遠くに戦線を進めてきたが、実は絶対防衛圏の内部の備

えはガラ空きの状態だった。そこでマリアナ群島をはじ
め沖縄やフィリピンまた本土防衛のため兵力を至急に増
強しなければならぬ。「学徒出陣」は、要するにこの
兵力増強にさいして必要な下級将校を確保することが最

「学徒出陣 70 年」に考えたこと

岩井 忠熊（本会代表）



大の目標だったといえる。とくに消耗した航空機搭乗員
の急速な大量養成のために学生生徒が期待された。

* * *

核兵器とミサイルの出現で、一時は現代戦の勝敗は一
瞬で決まり、兵力の大量動員はもはや必要ないなどとい

われた。だがイラク戦争はその
初期にこそミサイルが勝敗のカ
ギであるかに見えたが、結局の
ところ米軍もヘルメット・カ
ービン銃・防弾チョッキに身を固
めた兵士の活動に依存しなけれ
ばならなくなったことは、われ
われTVで明らかに認識した事実であ
る。

饗庭野演習場では新型輸送機オスプレイも
参加した日米共同訓練がおこなわれ、現場近
くでは銃砲声がたえ間なくきこえる。参加し
ている自衛隊員はいうまでもなく日本の青年
であり、湖西に住む私は彼らを目にするたび
に自身の戦争体験を思い出さずにおれな
くするのである。

* * *

あれから70年、しかしあの時と全くちがう
条件がある。平和憲法の存在である。饗庭野
の廠舎といえは、かつては京滋の学徒が軍事
教練で汗を流した場であった。今の学生
はそこではごかれて自衛官たちを自分か
ら遠くにいる何者かとしか見ないかもしれない。しかし
憲法九条の改悪はいつの日か学生を饗庭野につれ出し、
やがて戦場に立たせることになるのではないか。70年前
に「出陣」した学生生徒は90歳になっているはずである。
彼らのしわがれ声に耳を傾けてほしい。

ベンは第一主題をこんな風に展開し
ていくのつていう具合にね」とおっ
しゃいました。で、私はこれをヒン
トに短編を書きました。ラヴェルの
「ボレロ」が下敷きです。この曲は同
ジメロディを最初から最後までくり
返すばかりなのですが、それを演奏
する楽器が一回ごとに増えていって
最後は大合奏になる曲です。退屈な
ようできて、妙に気持をゆさぶられ
るこの曲を、私は引越して間もな
い八幡市（当時は町）の町会議員選
挙風景になぞらえて『声』という作
品（京都民主文学・1974:1）に
しました。宣伝カーならぬ宣伝自
転車が一日ごとに増えていき、しかも
名前を連呼するだけだった声が、新
人の革新候補の訴えや提案を次の日
にはそっくりまねて通っていく、毎
日その模倣候補の数をふやしながら
……。

礼 自治体の選挙といえは、西口
さんの口癖のコミュニケーション論が僕は面
白かった。「コミュニケーション」という言
葉は、中世の封建領主権からの独立
を求めたコミュニケーション（村などの自治
共同体）や後の「バリ・コミュニケーション」
に由来する。コミュニケーションとは働く労
働者の共同体つまり自治という意味
をもっている。「Q都物語」の最終
章の結びに出てくるものですが、し
がって西口文学は語の本来の意味
で「communism」の文学と位置付け
られると思いますね。

革也と丹波

岩崎革也旧邸の 新資料をめぐって

(上)

京都縦貫自動車道の延伸に伴い、京都最初の社会主義者にして名望家・岩崎革也（1869～1943）の旧邸が先頃取り壊された。政治家の犬養毅や女性解放論者の福田英子ら著名人が訪れた家として知られ、歴史資料が多く残されていた。革也はいかなる人物だったのか。芦田丈司氏（元須知高校教諭）が「京都新聞」丹波版に7月4日から連載した文章を資料として転載させていただく。

れるのは、邸内に須知川が流れ、橋が架かっている点だ。対岸に行き来できたようで、岩崎家の土地があり、木小屋などが建つ。とにかく規模が大きい。

棟札によると、1882（明治15）年に増改築したとみられ、施主名に「岩崎藤三郎五十一才」と記す。1896（同29）年の家相図は、一部を除き、ほぼ現在に近いが、江戸期より小規模になった印象は否めない。

それだけに、革也の父藤三郎の家に對する情熱が感じ取れる。大黒柱にはケヤキの尺物が使われ、築130年を経過した今も寸分の狂いもない。並々ならぬ資金を注ぎ込み、当時の優れた建築技術を結集したのである。

2 民権政党员が165人にも

明治期の丹波地方は、自由民権運動が盛んな地だった。1884（明治17）年3月、近畿最大の民権政党である立憲政党が結成された。10月までの届け出党员641人のうち、船井郡は165人を数え、全体の4分の1を占めた。党员数は京都府内で最も多く、地区別で見ると、須知33人、曾根27人、塩田谷27人、院内18人、森18人などと記録が残る。

岩崎革也の父である藤三郎も立憲政党に加盟していた。近所の酒造家前田英吉もまた党员であり、須知村で自由民権運動を指導した。

自由民権運動の広がりを見せると同時に、キリスト教の伝道が盛んに行われた。1884年6月に船枝村（現南丹市八木町）に丹波キリスト教会が設立されたのに続き、7月に須知村で説教会が開かれ、キリスト教が確実に浸透していく。

一例として、1886年の1年間を挙げると、須知村で説教会や伝道が行われた回数は計11回だったと伝えられる。1887年3月には、岩崎家の近くに住んでいた前田英吉が27歳で正式にキリスト教の洗礼を受けた。英吉は酒造庫を教会堂建築のために寄付するほど、熱心な信者となっていた。

さらに、少年時代の革也に強い影響を与えた人物として欠かせないのが、丹波地方の教育者として有名な井上半介（1842～1910年）の存在だ。

彼は船井郡新庄村（現南丹市八木町）に生まれ、私塾「発蒙館」を設立し、欧米の新しい知識や文化をいち早く紹介した。塾は家族的な雰囲気漂い、塾生30人余が寝食を共にした。少年時代の革也は、ここに入り、漢籍を学んだという。

半介もまた自由民権運動に共鳴すると同時に、同志社の創立者・新島

1 建築技術結集した旧邸

岩崎家は代々酒造業を営み、「絹屋」と号した。亀山藩より、苗字帯刀が許されていた旧家でもあった。

革也の父、松本藤三郎は船井郡野条村（現南丹市八木町）の造り酒屋に生まれたが、須知村（現京丹波町）の岩崎家で働いた。

この時、革也が生まれた。藤三郎の才能が認められたのか、1876



岩崎革也

自由民権運動の影響を受ける

（明治9）年9月10日、両親ほか家族全員が岩崎家に入籍し、岩崎姓になった。同日をもって、父藤三郎は家督を相続した。岩崎家は退勢にあったが、藤三郎は実業家としての才能を発揮し、家を盛り返していく。

今年1月から5月にかけて、邸内を調査した結果、江戸期と明治期の家の間取りが分かる家相図が2枚見つかった。屋敷の間取りや庭園、周辺の様子が詳細に描かれ、当時の様子がうかがえる。

1枚は1841（天保12）年の図で、母屋、2棟の土蔵、3棟の酒蔵、ほかにも多くの建物が並ぶ。注目さ

裏を丹波の地に招くなど、熱心なキリスト教徒になる。

多感だった革也の少年時代、ごく身近な場所、ごく身近な人物が自由民権運動やキリスト教に関係した。その後の彼の人生や思想形成に大きく影響した点は見逃せない。

3 孫に「兆民」と名付ける

明治に入り、日本は欧米化の道を突き進んでいた。丹波地方でもキリスト教伝道が盛んに行われ、若き日の革也は深い関心を寄せたという。

そんな息子を、父藤三郎は心配し、1888（明治21）年、大阪へ株取引の勉強に行かせた。いつからいつまで滞在したのかは明らかではないが、大阪で中江兆民（1847～1901年）を知り、その思想的な影響を受けたようだ。

兆民といえば、高知県生まれで、フランスの思想家ルソーを紹介し、自由民権運動の理論的な指導者になったことで知られる。農商務大臣辞職を求める活動に加わったとされ、保安条例によって東京を追われた。兆民は大阪に移り、自由民権派の日刊新聞「東雲新聞」主筆として迎えられた。偶然にも、革也と兆民が大阪での生活を始めたのは、同じ1888年だった。

一方で、高知県生まれの幸徳秋水（1871～1911年）は兆民の学僕として、大阪に滞在した。

革也が株の勉強していた際、秋水と接触したとも考えられるが、証明する文献が見当たらない。大阪滞在中に秋水が記した日記を調べたが、革也なる人物の記述はなかった。

ところで、革也が兆民の影響を受けたと考えられる証拠がある。かわいい孫に「兆民」と名付けたのだ。後に、革也は社会主義者として官憲に監視される身となるが、当時の内偵記録「特別要視察人状況」に、興味深い記述がある。

要約すると、「大正5年12月に（革也の）長男平造の妻が男子を産み、兆民と名付けたようだが、ほかに特記すべき行動はない」とある。

もう一つのエピソードがある。1915（大正4）年7月、秋水の義甥・幸徳駒太郎は革也に書簡で「土南新聞」発刊のための創業資金として、中江兆民絶筆の購入を革也に依頼した。即座に、革也は電報為替で100円を送金したが、行き違いがあり、絶筆を入手できなかったようだ。いかに革也が兆民を敬愛していたかが分かる。

4 31歳で初代須知町長に

岩崎家を盛り返した父藤三郎が、長男革也にかける期待は大きかったに違いない。革也は18歳で結婚し、



京都縦貫自動車道の延伸に伴い取り壊された岩崎邸

まう。驚くことに、父は4歳だった孫の平造（革也の長男）に家督を相続させた。並々ならぬ厳しい態度を見ることが出来る。

当時、岩崎家は船井郡10町村にわたって、農地30町歩（約30ヘクタール）以上を有する大地主であり、小作米が400～500石に及んだ。明治初期の須知村全体の石高が500石だったと言われ、いかに大規模だったかが分かる。

父藤三郎はこの資力を銀行業に活用し、革也を除籍してから4カ月後の1894年12月に須知銀行を創設し、頭取に就任した。

そのわずか半年後の1895（明治28）年6月、藤三郎は急逝してしまふ。革也26歳の時だ。結局革也が銀行業と酒造業を引き継いだ。

父の死後、道楽息子から一転し、革也は家業に専念する。周囲の評価も次第に高まっていた。1900年3月には、須知村議会から推挙され、31歳で須知村長になった。

翌年の1901年7月、須知、高原、竹野の3村が合併し、須知町となり、この記念すべき初代町長に革也が就いた。若くして政治力も経済力も手にしたのだ。しかし、革也は頭痛という持病があったので、しばしば京都市内の府立病院に入院した。

1902年12月に町長を辞任した。

（以下次号）

会員消息



三度目の手術から退院

田北亮介(北区)

内外ともに激動が続いています。少しばかり国際情勢も新しい方向に芽吹くかな、と思ったりしています。小生も八十の歳を迎えながら少しづつ前向きに進みつつあるようです。

さて、大変な御無沙汰お許しください。三度目のオペから退院し三カ月です。今は、消極的に再発を避けながらです。今後この様子で失礼を重ねますが、お許しください。合掌。

松川事件無罪50周年の集会に

矢吹正夫(下京区)
10月12日・13日福島大学での松川事

件無罪確定50周年記念集会に参加しました。一度は松川事件の記念集会に参加したいと思っていたので、とてもよかったです。

一ノ瀬・岩井先生が「経済」に寄稿

大阪市立大学名誉教授の一ノ瀬秀文さんが「経済」12月号に論文「タックス・ヘイブンと多国籍企業の税不正をいかにしてなくすか」を発表。また岩井忠熊・本会代表も同誌10月号まで10回にわたって「研究余話」を連載、好評でした。

訃報 堀江八郎さん

10月12日、世話人をして頂いていた堀江八郎さんがお亡くなりになりました。謹んでお悔やみ申し上げます。

「退会」

真柄征市さん(向日市) 死去

須田稔・桐田勝子『腹の底まで憲法でいこう!』

須田稔立命館大学名誉教授が桐田勝子さんとの共著をK9MP(憲法9条・メッセージ・プロジェクト)から出版された。

章立ては「講演・自衛隊が勇ましく戦争に行く：危険な足音がすぐそこに!」「憲法の真髄(こころ)」「平和への希(ねがい)」「かけがえのない命(いのち)」「主権者は私たち(以上が須田氏執筆)」「核の傘核のゴミはいらないこの星(地球)のどこにも:」桐田さん執筆)。タイトル「腹の底まで憲法でいこう!」は、ご存

BOOK



須田先生の「訴えと祈りの遺言」

じの通り蜷川語録からの採録。「編集後記」に「戦中戦後を経験した人は、今が『いつか来た道』に限りなく近づいていることを指摘します。もう間に合わない、まだ間に合う、そんなせめぎ合いのなかで、この本は誕生しました」とある。

他方、「主権者市民の歴史認識を変革するような幅広い力強い運動を地道に続けること:そして自己変革・人間としての成長を実現する。これが80余年の生涯で学んだ教訓(あとがき)とも。「狂気の時代に、何を感じ、何を考えてきたか」須田先生の「訴えと祈りの遺言」に是非とも耳を傾けて欲しい。(A5判256頁・1200円。090・82207・8642いずぶち)(井手)

民主運動史を語る会 11月例会

と き 11月29日(金) 午後2時~4時半

ところ 東山いきいき市民活動センター会議室

花見小路通古門前上がる東入る南側

テーマ 私の映画人生(仮)

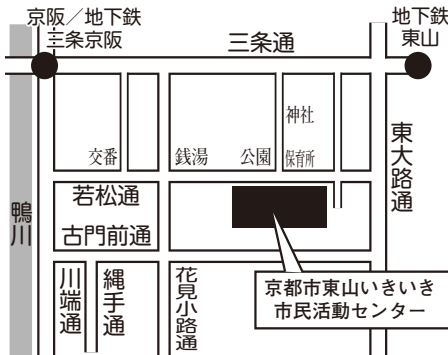
映画サークルから「祇園祭」制作まで

語る人 堀 昭三さん(元・京都府文化事業課長、
文化芸術会館館長)

1927年京都市生まれ。同志社中学・立命館大学二部経済学部卒。

1950年から67年まで労働省職員、京都国家公務員労働組合共同

会議議長、京都映画サークル協議会・京都労映会長など歴任。1965年に記録映画「テントからの報告」「日本の憲法」を制作。67年、映画「祇園祭」制作のため府職員に採用され文化事業課長。のち文化芸術会館館長、学校法人両洋学園常務理事などを勤めた。上京区在住。



催し案内

自由法曹団京都支部
創立50周年シンポジウム「京都と日本の未来を語る」

11月30日(土) 午後1時30分~4時45分、ラポール京都大ホール(四条御前西)。安斎育郎・二宮厚美・川添誠・三上侑貴(司会・中村和雄) 無料。なお記念レセプションが当日午後6時からリーガロイヤルホテルで開かれる。

京都96条の会発足記念シンポジウム

11月16日(土) 午後1時30分、龍谷大学深草校舎22号館。廣渡清吾(日本学術会議前会長)の講演「約束と希望としての日本国憲法——安倍政権の反動的憲法政策を糾す」。資料代500円。

編集後記



▼今号は原稿をたくさんいただき、うれしい悲鳴でした。そんな訳で私の連載「京都民報」私史」は休載しました。前号にご指摘のあった堀昭三さんに11月例会の講師をお願いしました。50年以上も前の資料もきちんと保存されており、「誰も知らない映画運動史」が聞けると思います。多数ご参加ください。

▼「その時、私は:」「忘れ得ぬ人」の原稿を募集しています。短くて結構です。ぜひお寄せください。(湯浅俊彦)